

<総説>

ソーシャルワークにおける 「ナラティブ・アプローチ」をめぐる議論について

横 山 登志子*

抄 録：本稿の目的は、ソーシャルワーク（以下、SW）におけるナラティブ・アプローチの貢献と、問題や課題についての議論を整理し、筆者の意見を提示することである。SWにおけるナラティブ・アプローチの貢献は次の4点である。①SWの知識の権威性について「問い」を投げかけた点、②クライアントの生きたローカルな知識が注目された点、③価値実践としてのSWを考えるきっかけになった点、④ソーシャルワーカーは何をどのような立場から援助を行うのかについての自己言及性が求められた点である。問題・課題は次の3点である。①理論と介入の一貫的な説明、②物語の二分法に関してのリアリティーある説明、③SWに関する反省的实践（研究）の必要性である。特に3点目の課題について、SW理論史でソーシャルワーカーがどのように規定されてきたのかに関する批判的検討の必要性和、実践経験においてソーシャルワーカーがどのような自己規定の変容を経験しているのかについて明らかにすることが重要であることを述べた。

キーワード：ソーシャルワーク、ナラティブ・アプローチ、価値実践、自己言及性

はじめに

ソーシャルワーク（以下、SW）における社会構成主義の影響として近年、「ナラティブ・アプローチ」¹⁾が注目されている。これは単にSW理論史に登場した新しい技法論というよりは、1980年代以降に主流であった一般システム論や生態学理論を基盤とする「生活モデル」「エコ・システム論」などの認識論的基盤への懐疑的スタンスをとるという意味において、SW理論に大きなインパクトを与えるものである。つまり、結論から先に述べると、「ナラティブ・アプローチ」とはSWの「専門性のあり方」や「援助関係」を根本から問い直す「問い」であり、「ソーシャルワーカー（援助者）とは誰か？」という自己言及の応答を求めるものであると考えられる。しかしながら「ナラティブ・アプローチ」には無視できない疑義や問題点も存在する。そこでこの小論では、「ナラティブ・アプローチ」のSWにおける貢献可能性について明確にするとともに、「ナラティブ・アプローチ」に向けられた疑義や問題点について整理し、若干の議論を行うものである。

1. SW理論史における「ナラティブ・アプローチ」

SWの理論史を振り返れば、長年「個人か社会か」をめぐっての論争を繰り返してことがきたことがよく指摘されるが、その論争に一定の理論的決着をつけたのが、個人と社会を同時に説明する一般システム理論や生態学の導入によるジャーメインらの「生活モデル」²⁾でありメイヤーらの「エコ・システム論」³⁾であった。しかし、1980年代後半にはポストモダンの思想的潮流がSWにも導入され、同時に近接領域である家族療法から社会構成主義⁴⁾の「ナラティブ・セラピー」の技法や考え方が紹介されるなどによって徐々にSW理論史において「ナラティブ・アプローチ」が無視できないものとなっている。「ナラティブ・アプローチ」がこのような注目される理由は、木原⁵⁾が指摘するように援助関係における「主体客体の認識問題、専門家の意図的な介入への懐疑や専門性と言われるものに付随する権力構造」について批判的な立場を示した社会構成主義やポストモダニズムの立場にあると思われる。

社会構成主義やポストモダニズムでは、クライアントやクライアントの問題を対象化・客体化したうえで専門知識によってアセスメント（評価）し、専門技術によって援助行為を行うというモダニズムの思考様式に基づく一連のSW活動に対して、クライアントに対する絶対的

* 医療福祉政策学講座

な優位性をみて批判する。そして専門家の依拠する専門知識はクライアントの生きた知識を無視することから成り立つという辛辣な指摘を行うのである。SWがモダニズムを支えてきた本質主義、客観主義に立つことで専門性を向上してきたことを鑑みると、SW理論史を形づくってきた知識に対する厳しい自己批判を内在しており、相当にラディカルな立場に立つものである。従って、複雑で多面的な現象を扱う実践科学としてのSWに厳密かつ純粋な形で取り入れるには限界が伴うようにも思われる。また赤川⁶⁾のいうように「客観主義や本質主義が健全に存立するかぎりにおいて有意味な主義主張たりえる」という点には首肯するものである。しかし、なおも「ナラティヴ・アプローチ」に惹かれるのは、社会構成主義の相対主義的立場からみえるさまざまな命題群に取り組むことによって、それまで自明とされていたこと(知識)をあらためて問い直し、ひいてはSW理論の生成へ導くその推進力、生産性に期待したいというプラグマティックな立場に立つからである。本論ではこのような立場から「貢献」と「課題・問題」について考えていくことにする。

2. 家族療法における「ナラティヴ・セラピー」とは

SWにおける「ナラティヴ・アプローチ」の源流は家族療法の「ナラティヴ・セラピー」である。「セラピー」と命名されているが、その斬新な技法群を支える認識論はいわゆる「診断主義」的な援助スタンスとは全くことなる援助展開であり、家族療法の領域を超えて、対人援助の各種領域に影響を与えたといえる。家族療法の流れを大きく変えるグーリシャンとアンダーソンの記念碑的論文「Human Systems as Linguistic Systems: Preliminary and evolving about the implications for clinical theory」⁷⁾が家族療法分野の専門誌『Family Process』に発表されたのは1988年である。また社会構成主義に基づく援助方法論を体系化したのは、家族療法の領域で実践を行っていたホワイトとエプストンらによる『物語としての家族』(1990年)⁸⁾であった。その後、ホワイトらによる「ナラティヴ・セラピー」関連の著書が我が国でも次々と翻訳され、最近では実践家による事例報告や研究者らによる著書もみられている。小森⁹⁾はホワイトを引用し「ナラティヴ・セラピー」とは「人々を彼ら自身の専門家として位置づけ、問題を人々とは離れたものと考え」、「セラピスト／コミュニティーワーカーと人生を議論されている当人とのあいだの共同作業における人々の人生のストーリーの理解の仕方やそのストーリーを再著述する方法に関連している」もので、「歴史や、人々の人生に影響を与える幅広い文脈、そしてセラピーの倫理ないし政治学に関心を抱く仕事の仕方」だと述べてい

る。「ナラティヴ・セラピー」として括ることができる代表的モデルは、野口¹⁰⁾によるとホワイトとエプストンの「外在化とオルタナティヴ・ストーリー」、グーリシャンとアンダーソンの「無知のアプローチ」、アンデルセンの「リフレクティング・チーム」などであるが、必ずしも自ら「ナラティヴ・セラピー」としているわけではなく、例えばグーリシャンとアンダーソンは自らのセラピーを「コラボレイティブ・セラピー」と述べている。

3. 「ナラティヴ・セラピー」が提示した基本的立場とは

「ナラティヴ・セラピー」の特徴のひとつは物語論的世界観である。「人は物語を生きる存在である」と考え、その物語を内的モデルとして考えるのではなく、人を取り巻く幅広い文脈や歴史、言語を通じた社会的相互交流などによって編み出されたものであり、その物語はある種の政治性が関係していると考える。「ナラティヴ・セラピー」のキーワードのひとつとして紹介されるドミナント・ストーリーとオルタナティヴ・ストーリーはこのような物語を生きる存在としての自己概念を前提としている。ドミナント・ストーリーとはホワイトによると「ある状況を解釈する『正常な』やり方、ないしは、ある問題についての仮説のうち、文化のなかにあまりに深く浸透していたり、広くゆきわたっているために『現実』として呈示される観のあるもの」と述べ¹¹⁾、社会文化的に望ましいとされた生き方としての物語といえる。障害者や同性愛者などにとって自らの経験はそれから乖離しているためにアイデンティティーの葛藤を増大させるのである。他方のオルタナティヴ・ストーリーはモーガンによると「自身によって同定され、相談者自身が生きたいと考える人生に沿った」物語だとされる¹²⁾。「ナラティヴ・セラピー」ではドミナント・ストーリーから無視され周辺化された例外に注目し、他者との対話によって問題を外在化し、自らを苦しめていたドミナント・ストーリーをオルタナティヴ・ストーリーに書き換えるという作業を行うのである。「ナラティヴ・セラピー」のもうひとつの特徴は、謙虚さが際立つ援助者のスタンスといえよう。これはホワイトが「人々を彼ら自身の専門家」として位置づけると述べたこと、アンダーソンとハーレーンが「無知のアプローチ」をひとつの立場として進化させたことに端的に表れている。「無知のアプローチ」は今や「ナラティヴ・アプローチ」の援助者のスタンスをあらわすものとなったが、「無知識でただ聞いていればいい」というわけではない。野村¹³⁾は「純粋な好奇心に満ちた構えであり、クライアントから教わるという姿勢である」と述べている。つまり、このスタンスは専門職としての知識や技術の否定を意味するのではなく、専門職が有する専門的知識・技術のもつ政治的特権

性についての否定である。いくら専門知識を有する専門家だとしても、目の前のクライアントの生きる物語の世界について知ろうとすると、専門家は全くの「無知」から出発する。従って、クライアントに教えてもらうという対話のプロセスを最大限重視し理解していくのである。このようなクライアントに教えてもらうスタンスをハーレーン「哲学的スタンス」と述べている¹⁴⁾。

こうしてみると、「ナラティブ・セラピー」が提示したものは、いわゆる心理療法としての「セラピー」に関する議論の枠を超え、対人援助すべてに共通する援助関係を「問う」問題提示を行ったといえることができる。

4. 「ナラティブ・アプローチ」がSWに与えた「貢献」

SWの文脈において木原は「ナラティブ・モデル」という用語を採用し、その「強み」を4点指摘している¹⁵⁾。第1に自明性の解体と社会改革志向である。「言葉が世界をつくる」とするこの考え方は、例えば「老人」「障害者」というコトバに「常識のように潜ませている感覚」に対して、鋭い反省を迫るものと述べる。第2にローカリティー・当事者性の発見と接近である。社会福祉の対象者の声にならない「ローカル」な「ヴォイス」を発見していくことに強みを発揮する。第3に参加者という視点である。SWは「クライアントとの間に「権威」というパワー構造による上下関係によって自己の専門性と地位の安定を保ってきた」が、この関係にメスを入れることによって、SWは「『介入』の専門家から『会話への参加者』」であることが強調され、「専門家を消し去り」「当事者への限らない権限の委譲（エンパワーメント）」がなされる」と述べている。第4に意味論・価値論の新しい方向性である。「SWにおける価値論は、経験科学によって、価値判断排除の方向で、議論の外に置かれる傾向があった」。しかし、「知識にはかならず価値が含まれている」と主張する立場から、SWにおけるクライアントの意味探求の課題をあらためて取り上げることが重要視されるようになった」と述べる。

加茂も「ナラティブ・モデル」という言葉を採用し、その強みを3点にまとめている¹⁶⁾。第1に新たなエンパワメント論の方向性を示したことである。「周辺のストーリーの編集を援助者がクライアントとともに作り出すこと」がこのモデルの特徴だとする。加えて「超越的なポジションを放棄した治療者の関与法は、専門家がクライアントに対してメタレベルの専門性をもつことを否定し、問題の専門家はその問題の当事者であるとする立場」をとる。第2に多義性が認められるということである。これまでの援助理論では「正常あるいは理想の状態が想定されており」「問題をもっている状態は否定すべき

状態」であるため変化することが求められていたが、「ナラティブ・モデル」では「問題の当事者が、生きてきた歴史のなかに存在していた事実をもとに、新たなストーリーを構成して、現実を再構成しようとするので、様々なストーリーの存在が認められ」「人の現実構成の自由度を拡大することができる」と述べる。第3に問題に関する責任論による論争を避けられることである。問題は「個人の人格あるいは精神等に還元する方法をとらず」「問題は関係者相互のストーリー形成の力学によって、構成された現実であると捉えられる」ので、特定の個人への責任追及を免れることができるのである。

松倉¹⁷⁾は、「物語モデル」という言葉を採用し、「物語モデル」をめぐる文脈の混乱を整理し建設的に議論するために「実践レベル」と「メタレベル」>、<「技法の追求」と「価値の追求」>の2軸から4つに分類している。「実践レベル」:「技法の追求」を「ナラティブ・アプローチ」としミクロ的な援助が中心とし、「実践レベル」:「価値の追求」を「ナラティブ・ソーシャル・アクション」とし、マクロレベルも射程におくポリティカル・プラクティスだとする。「メタレベル」:「技法の追求」を「ナラティブ・ベイスド・プラクティス」としエビデンス・ベースド・プラクティスに対比的な「ローカルで身体性をおびたクライアントの知をそのまま研究の際の言語とする」もうひとつの調査・研究方法を提案し、「メタレベル」:「価値の追求」を「ナラティブとしてのモダン・ソーシャルワーク」とし、モダンの歴史そのもののSWの「自己問い直し」を迫るようなSWの歴史性や価値論の議論である。これらを包括する「物語モデル」の可能性として、第1に「同じ『哲学』のなかにミクロ・アプローチとマクロ・アプローチが同居すること」とし、このミクロとマクロの反復実践こそがSWだとする。第2に「生活の矯正、適応指導のための援助ではなく、トータルとしての人間存在の意味を見いだすための援助として位置付けていること」としている。

秋山¹⁸⁾は「ナラティブ・アプローチ」に対して基本的に批判的立場をとりながら、評価できる点として第1に「クライアントの意味の世界と現実解釈の仕方を理解することが、このナラティブの発想の導入で容易になったこと」をあげている。また第2に「オルタナティブ・ストーリーをクライアントに語らせることにより、問題の解決目標をクライアントに委ねやすくなったこと」とし、クライアントを依存的にさせない点で評価している。

以上を踏まえてSWにおける「ナラティブ・アプローチ」の貢献について筆者なりに以下の4点を提示したい。第1に、自明とされている知識を、その政治性という観点から再検討を求め、SWの知識・技術・価値に裏

付けられた「専門性」のあり方に「問い」を突きつけた点である。「ナラティブ・アプローチ」はSWが自明的に有している専門的知識について、「専門家」としての権威性を裏付ける政治的装置としても存在していると指摘し、超越性を否定した。ここで問題視されたのは、専門的知識そのものの否定ではなく、その知識の超越性を信じる「専門性のあり方」への指摘であった。これは、SWが自明視している事柄について今一度、検討し直す枠組みを与えたという点で意義が見出せる。例えば「自己決定の尊重」「主体性の尊重」を声高に提唱するSWは、どのような立場性をもってそれを主張するのかということへの内省的検討である。第2に、物語（言説）の多声性、多義性を許容し、どれもが超越的立場にはならないという中で、これまであまり注目されてこなかったローカルな知識、当事者性がこれまでと異なった視点で注目されるようになった点である。「ナラティブ・アプローチ」では、物語の多声性や多義性を許容し、SWの依拠する物語（言説）もその一つとし、超越的立場を持ち得ない。これによって、無視されるか周辺化されてきた当事者自身による物語や、局所的に意味をもつローカルな知識などに新たな注目が向けられるようになった。第3として、あらたなクライアントとの関係性の模索を行うという点で価値実践としてのSWを再認識させたことである。「ナラティブ・アプローチ」が提示したものは上記したように、「専門性のあり方」についての自己反省的立場である。それは、一言でいうと価値実践としてのSWの再認識である。第4に、SWの自己言及性が求められた点である。物語の多声性・多義性を許容し、SWの物語も超越的立場を否定され、多くの物語が乱立するなかで、SWはどのような物語を、どのような立場から何を語るのか、そしてそれに伴う政治性についてどう考えるのかについて自覚的であることを求められている。SWの自己言及性についてはこれまであまりにも無自覚であったといえよう。

5. 「ナラティブ・アプローチ」に内在する「問題」

「ナラティブ・アプローチ」には前述の「貢献」に対して、認識論的基盤への批判的見解や、課題、問題なども提示されている。

前述の木原は、「ナラティブ・モデル」の「難題」として次の2点を述べている¹⁹⁾。第1に理論と介入のギャップである。第2に相対主義とアナーキズムについてである。「大いなる物語り」を否定して（相対化して）「幾つかの物語りのなかの一つのストーリー」を強調する相対主義の「歯切れのよさ」とは裏腹に、「そう単純に『大いなる物語り』や本質主義を捨てられるのか」という疑問が生じると述べ、仮に可能であったとしても「諸

物語の乱立」という難題が待ち受けているのだというわけである。SWの『『社会正義』という価値観についてあらゆる事象を相対化したはずなのに「社会正義」だけ普遍的価値であるとするのなら、ここに「ポストモダンのフィロソフィーとは矛盾してしまう」と述べている。

加茂も前述の「強み」とあわせて「議論すべき問題点」を5点挙げている²⁰⁾。第1に価値判断の問題である。このアプローチは、「過去的生活史のなかでの言説やストーリー生成過程の分析に関しては有効性をもちえても、どの言説やストーリーを選択するべきであるのかという倫理的決定のレベルにおいては効力を失する」という問題が生じると述べる。第2にストーリーの実体的二分法の問題である。複雑な日常を、ドミナント・ストーリーとオルタナティブ・ストーリーという二分法で区別するのは可能なのかという問題であり、実在的類型のような二分法はモダンの発想そのものと述べている。第3に超越的主観の問題である。何がドミナント・ストーリーであるのかを決定し、オルタナティブ・ストーリーを模索するということは超越的主観を前提としなければならないが、これが「ポストモダンによって否定された超越的な主観を復活させることになってしまう」と述べる。第4にナラティブ・モデルの自己矛盾についてである。「対人援助を治療と定義づけることの正当性は時代のドミナントな言説によって支えられている。…ところがナラティブ・モデルは言説の現実定義力に対抗することを戦略目標とするため、時代の支配的言説である治療思想に基づいた実践を行うことは自己矛盾となる。ナラティブ・モデルを強気に提唱するならば、この矛盾に自覚的でなければならない、それゆえ何らかの解決法が自己否定的に模索されなければならない」と述べる。第5に言説の直接的な主体形成論の問題である。「日常に存在しているのは、多義的で不定形である、未だストーリーにはなっていない様々なコミュニケーションの流動体であるので、問題のある状態はドミナント・ストーリーに支配されている事態として一義的には定義されえない」とする。

また、松倉²¹⁾も「物語モデル」の「課題」として第1に『『実践レベル』』における新しい援助論としての『物語モデル』という文脈では、未だ実際の実践報告が少ないため、パースペクティブの理論ばかりが先行し、具体的な援助プロセスの研究は途上であること。第2に「技法論と価値論の一貫性が理論的に明示されること」である。第3に『『メタレベル』』における自己言及論としての『物語モデル』という文脈においては、物語の概念からSWの歴史や理論を書き直すことが試みられるべきである」という点である。第4に「質的方法ともいうべきもう一つの方法としてのナラティブ・ベイス

・プラクティスにおける調査・研究方法の確立と数的データに遜色ないナラティブ・データによる評価方法の明示」である。

「ナラティブ・アプローチ」に批判的な秋山は「問題」として6点列挙している²²⁾。第1に「言説の単純化の問題」である。ドミナント・ストーリーとオルタナティブ・ストーリーという単純な二分化論への批判である。第2に「境界の問題」として、ドミナント・ストーリーとオルタナティブ・ストーリーを区別する境界や判断基準の不明性である。第3に「オルタナティブ・ストーリーによる意味の変容への疑問」である。「ミクロ的な側面での意味の変容による行動の変化は認めることができるが」「現実や事象の意味の変容は極めて難しい」とする。第4に「倫理・道徳に反するオルタナティブ・ストーリーの尊重の問題」で、「ストーリー尊重の範囲を明確に設定しない限り、ナラティブ・アプローチを容易に社会福祉現場で使用すべきでない」と断言している。第5に「オルタナティブ・ストーリーと規則の問題」で、社会のドミナント・ストーリーである制度を用いて援助を行うなかで、クライアントのオルタナティブ・ストーリーがこの規則や原則に抵触する場合があると述べる。「人間の主体性と社会性のこの相克を克服する論理がナラティブ・アプローチには不在である」としている。第6に「言語表現の問題」で、社会福祉対象者の多くは言語活動が不可能な対象者が多い現状と述べ「きわめて無責任な論理であり援助法である」と批判している。

以上の問題や課題には、さまざまなレベルのものが混在している。ここでは指摘された問題や課題について筆者なりにまとめ直し、若干の考察を行うこととする。第1に木原や松倉が指摘しているように、SWにおける「ナラティブ・アプローチ」の理論と介入（援助プロセス）の一貫性ある説明という課題である。これには松倉が指摘するようなミクロからマクロへの実践的展開がいかなされるのかという実践例が不可欠であり、秋山が指摘するようにミクロ的な意味の変容のみならず、「現実や事象の意味の変容」をも含めた説明が求められている。第2に加茂や秋山が指摘するストーリーの二分法に関してであり筆者も率直な疑問を持っている。しかし、「オルタナティブ・ストーリー」について言えば、「ドミナント・ストーリー」から解放された「もうひとつのストーリー」であり単一の様相を呈しているわけではないのである。だとしても、単純な二分法で包含されない、グレーゾーンともいえるべき部分があるのではないのかという疑問が拭えない。ストーリーの境界に関するリアリティーのある説明が必要である²³⁾。また、これに関してストーリーの価値判断の問題が指摘される。筆者は、価値判断の主体は、厳密にいうと他者との対話をとおして当

事者によって選択されていくものだと考えている。加茂のいう「どの言説やストーリーを選択すべきであるのか」という疑問には、「選択すべき」という視点がまず疑われる。第3にSWの自己矛盾を克服する反省的实践・研究の必要性である。これは加茂が「超越的主観の問題」として何がドミナント・ストーリーで、オルタナティブ・ストーリーなのかを判断する超越的主観は専門的知識から遠ざかる援助者の立場を覆し、時代に多大な影響を受ける援助思想に基づく援助者の「自己矛盾」となると述べたことに自覚的であることを原点とする。「ナラティブ・アプローチ」はそのような超越的立場には立たないとすれば、松倉が指摘するようにSWの歴史や理論を「物語」の概念から書き直すことが求められるのである。クライアントに対して超越的立場を前提としてきたSWをみずから「問う」姿勢が求められているといえる。秋山の指摘する第4・第5点目の批判は、むしろ我々が「倫理」的、「道徳」的として絶対視してきたもののや、その具現体である「規則」そのものを相対化することから新たな理解を試みようとするものなのである。しかし、これに関して木原の「そう簡単に『大いなる物語』や本質主義を捨てきれぬのか」という指摘が最も重大である。我われソーシャルワーカーは「大いなる物語」の一部を形成している可能性があり、また無自覚に染み込んだ本質主義的思考をそう簡単に、相対化させ、手放すことができるのかという問題である。筆者は「ナラティブ・アプローチ」に代表されるポストモダニズムや社会構成主義のムーブメントはモダニズムへの反省や修正を迫るものであり、大局的に捉えるとひとつの螺旋的な運動体のなかのひとつの局面にすぎないのではないかという立場に立ちたいと考える。モダニズムを批判したからといって元のさやに戻ることをも選ばないとする、何が求められるのか。そのひとつのキーワードとして「反省的实践」「反省的研究」(SWの物語(言説)の変容をも視野にいれた実践や研究を行う)を志向することが求められているのではないかと考える。ところでこの問題に関して木原は「SWの『社会正義』という価値観も相対化された一つの物語りではないのか」「あらゆる事象を相対化したはずなのに、『社会正義』だけ普遍的価値であるとするなら、ここにポストモダンのフィロソフィーとは矛盾してしまう」という指摘をしているが、「ナラティブ・アプローチ」ではもちろんSWの「社会正義」という価値観も相対化された物語であるとする。しかし、それは「社会正義」を重要視し、それに沿った実践を行うという立場性(政治性を伴った)を選択するという表明であり、ひとつの限界を伴った選択的行動だと考えると、木原のいう矛盾にはあたらないのではないかと考えるのである。最後に、秋山の指摘する「言語表現

の問題」について一言だけ述べると、社会福祉対象者のなかには必ずしも自ら言語表現することができない人がいることはそのとおりであるが、例としてあげている精神障害者や知的障害者などの一括的括りには疑問を持つものである。また、「ナラティブ・アプローチ」が重視するのは「言葉」を介して構成されるストーリーだとすると、対象者がどのように言語表現するかと同時に、我々援助者がどのように言語表現するのか（例えば、「精神障害者」をどのような人々の集団だと認識してきたのか）が問われなければならない。その意味で対象者が言葉を持たないからといって、「ナラティブ・アプローチ」が意味をなさないものではないと考える。

おわりに：「ナラティブ・アプローチ」が「問う」ものに、いかなる応答をするのか

冒頭で「ナラティブ・アプローチ」が提示したのは「専門性のあり方」や「援助関係」への「問い」だとし、「ソーシャルワーカー（援助者）とは誰か？」という自己言及の応答を求めるものであると述べた。その意味するところは、周辺化されあるいは無視されてきた当事者の物語と、SWの依拠する物語（言説）が同等の価値を持つということを引き受けて、当事者とどう向き合うのかという「価値実践としてのSWの再考」だと捉えたい。さらに具体的に言うとSWの実践的価値をあらわす「主体性尊重」「自己決定」「パートナーシップ」などの概念を、我われはどの立場に立って、何を行うのかを明らかにする必要があるということである。これはつまり「ソーシャルワーカーの自己言及性」が求められていると換言できよう。近年の実践を方向づける「エンパワメント実践」も、援助の「パワー」構造について吟味することなしには真に実現しようもないことは言うまでもない。

物語論的理解に立つクライアント理解に有効な概念装置は「ナラティブ・アプローチ」が呈したドミナント・ストーリーとオルタナティブ・ストーリーという対概念が注目される。また解釈学的アプローチに立つ医療人類学のクラインマン²⁴⁾による「Disease（疾患）」と「Illness（病い）」という対概念なども有効である。しかし、援助という場面ではもうひとりの当事者が存在する。つまり、援助という関係における「援助者」という当事者である。この「援助者」という当事者についての物語論的理解についてはこれまでにほとんど注目されてきていない。「ナラティブ・アプローチ」はSWを「問う」とともに実践におけるソーシャルワーカーを「問う」ものであるとすると、SW理論史のなかでソーシャルワーカーをどのように自己規定してきたのか、またソーシャルワーカーとしての「わたし」の経験のなかでどのような自己

規定が生成されてきたのかについて問われなければならない。筆者はこの2点を明らかにすることが「ナラティブ・アプローチ」の「問い」に応答することだと考えている。

注釈・引用文献

- 1) 「ナラティブ・モデル」とも言われ、「物語モデル」「物語療法」などと訳されることもある。
- 2) Germain, C. & Gitterman, A. (1980). *The Life Model of Social Work Practice*. New York : Columbia University Press.
- 3) Meyer, C.H ed. (1983). *Clinical Social Work in the Eco-Systems Perspective*. New York : Columbia University Press.
- 4) バー (Burr, V.) によるとSocial constructionismには「家族的類似性」があるだけだとし、次のうちひとつでも備えていればよいとする。①自明性を帯びている所与の知識への批判的スタンス、②歴史的、文化的な特殊性の自覚、③知識が社会過程によって支えられているという理解、④知識と社会的行為が相伴う過程だという認識。千田はこれを踏まえ、①社会を知識の観点から検討しようとする志向性、②知識は人々の相互作用によってたえず構築され続けることへの自覚、③知識は広義の社会制度と結びついていることの認識だとしている（以上、千田有紀（2001）「構築主義の系譜学」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房、1-41.）
- 5) 木原活信（2000）「ナラティブ・モデルとソーシャルワーク」加茂陽編『ソーシャルワーク理論を学ぶ人のために』世界思想社、54-84.
- 6) 赤川学（2001）「言説分析と構築主義」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房、63-83.
- 7) Harlene Anderson, Harold Goolishian. (1988), *Family Process*, 27-3, 371-393.
- 8) Michael White, David Epston. (1990). *Narrative Means to Therapeutic Ends*. New York : W. W. Norton. (=『物語りとしての家族』小森康永訳（1992）、金剛出版.）
- 9) 小森康永（2003）「ナラティブ・セラピー（ポストモダンイズム、社会構成主義）」日本家族研究・家族療法学会編『臨床家のための家族療法リソースブック 総説と文献105』金剛出版、56-60.
- 10) 野口裕二（2002）『物語としてのケア』医学書院、4-5.
- 11) Michael White, (1995). *Re-Authoring Lives : Interviews & Essays by Michael White*. Adelaide, South

- Australia, Dulwich Centre Publications. (=『人生の再著述』小森康永・土岐篤史訳 (2000), ヘルスワーク協会.)
- 12) Alice Morgan, (2000). What is narrative therapy? : An easy-to-read introduction. Adelaide, South Australia, Dulwich Centre Publications. (=『ナラティヴ・セラピーって何?』小森康永・上田牧子訳 (2003), 金剛出版.)
 - 13) 野村直樹 (1999)「無知のアプローチとは何かー拝啓セラピスト様」小森康永・野口裕二・野村直樹編『ナラティヴ・セラピーの世界』日本評論社, 167-186.
 - 14) Harlene Anderson, (1997). Conversation, Language, and Possibilities. Basic Books. (=『会話・言語・そして可能性』野村直樹・青木義子・吉川悟訳 (2001), 金剛出版)
 - 15) 木原活信 (2000)「ナラティヴ・モデルとソーシャルワーク」加茂陽編『ソーシャルワーク理論を学ぶ人のために』世界思想社, 54-84.
 - 16) 加茂陽・大下由美 (2003)「権力の秩序からずれる日常性ーエンパワーメント論」加茂陽編『日常性とソーシャルワーク』世界思想社, 58-81.
 - 17) 松倉真理子 (2003)「ソーシャルワークと物語ー『物語モデル』をめぐるさまざまな文脈ー」評論・社会科学 (同志社大学人文学会), 71, 25-45.
 - 18) 秋山薊二 (2004)「社会構成主義とナラティヴ・アプローチ」関東学院大学人文科学研究所2003年度所報, 27, 3-16.
 - 19) 木原活信 (2000) 前掲書.
 - 20) 加茂陽・大下由美 (2003) 前掲書.
 - 21) 松倉真理子 (2003) 前掲書.
 - 22) 秋山薊二 (2004) 前掲書.
 - 23) 筆者はライフストーリー研究で、女性アルコール依存症者の語りの分析を行った際、「ドミナント・ストーリー」「オルタナティブ・ストーリー」のどちらにもまだ区別されない「未知のストーリー断片」があることを指摘したことがある。
 - 24) Arthur Kleinman, (1988). The Illness Narratives : Suffering, Healing and the Human Condition. New York, Basic Books. (=『病いの語りー慢性の病いをめぐる臨床人類学』江口重幸・五木田紳・上野豪志訳 (1996), 誠信書房.)